

Crossing する花卉 —エスノグラフィと Reconciliations— Crossing Petals: Ethnography and Reconciliations

飯嶋 秀治

IJIMA SHUJI

九州大学人間環境学研究院

Kyushu University, Graduate School of Human-Environmental Studies

キーワード

フォーカシング 和解 エスノグラフィ

Keywords

Focusing; Reconciliation; Ethnography

Quadrante, No.21 (2019), pp. 121-128.

目次

1. Crossing する花卉、Crossing する爆発
2. フォーカシング、ラディカルな経験主義、交差すること
3. いかにつなげるのか—開かれた和解とエスノグラフィ
4. もうひとつの実践—ポスト・ファクト時代における

Globalizing Reconciliations

1. Crossing する花卉、Crossing する爆発

2004年に他界してしまった保刈実さん（1971～2004）が『ラディカル・オーラル・ヒストリー』のもととなる国立オーストラリア大学に提出した博士論文で投げかけた最後の言葉。

「僕は、クロス・カルチュラルな実践を行うことは、その定義上、自らの文化的な枠組みを揺るがすリスクを免れない、と感じている。そうでなければ、どうしてそれを『クロス・カルチュラル』と呼ぶことができるだろう。さて、僕もこうして、一枚の花弁を投げ込むことができた。ゆっくりと爆発を待とうではないですか。」[Hokari 2003: 266]¹

他方で 2018 年に他界してしまった石牟礼道子さん（1927～2018）が、2012年『ETV 特集「花を奉る 石牟礼道子の世界」』で放映された際に紹介された言葉（冒頭は胎児性水俣病患者さんの母親の言葉から始まる）。

「あの貝が毒じゃった 娘ば殺しました お
とろしか病気でござすばい 人間の身体には
いった 会社の毒は 死ぬ前は痩せて痩せて
腰があっちゃこっちゃんに振れて 足も紐を結
ばれたように振れてましたばい 嫁入り前の
娘の腰が もうおおかた動けんごとなりまし
てから 桜の散りはじめまして きよ子がは
うて出て 縁側から こう そろりそろり
滑り降りるとでございます 花びらば かな
わぬ手で 拾いますとでございます いつ
までも座って 指先でこう 拾いますけれ
どもふるえのやま 曲がったままになつと
りますから 地面ににじりつけて 桜の花びら
のくちやくちやくにもみしだかれて 花もあな
た かわいそうに

¹ 邦訳は Being Connected with HOKARI MINORU の保刈実 ている。
奨学金 HP より。塩原良和・保刈由紀・内田恭子訳となっ



(お母さんが) チッソの人に 花びら一枚だけでよございます 拾うてやっはくださいませんかかって おっしゃいました それを文にかいてくださいませって 私 (石牟礼) にそれは大変なことを頼まれたなって思いました」。²

2 人の世代も活躍の場も異なった著者が、苦境に生きる人びとと接した後に奇しくも花卉が想念に残っていたことになるが、この連想を展開させるとしたなら、次のようになるであろう。

石牟礼さんの言葉において、①起点となったのは花びらであり、②そこににじり寄ろうとする胎児性水俣病の娘さん、③その姿を見ていた母親が、④訪問してきた石牟礼さんに言葉を託し、⑤石牟礼さんはその言葉をもって、⑥会社 (チッソ) の社員が、にじり寄る娘さんが花びらをひろえるように動くことを祈るように言葉を紡ぐのである。

この念願に、保莉さんの言葉を交差させるなら、次のようになるのではあるまいか。①起点となるのはカントリーだ [保莉実とつながる会 2010]。②そこににじりよろうとするオーストラリア先住民グリーンジ民族 [Hokari 2011]。③その姿をみていたグリーンジの長老 (ジミー・マンガヤリさん) が、④訪問してきた保莉さんに言葉を託し、⑤保莉さんはその言葉をもって、⑥その読者たちが、にじり寄るオーストラリア先住民たちがカントリーに出遭えるように動くことを祈るように言葉を紡ぐのである。

それが、Crossing する花卉の爆発 — Reconciliation の意味なのかもしれない。

2. フォーカシング、ラディカルな経験主義、交差すること

以上の保莉さんと石牟礼さんとの花卉の Crossing というのは両者を知る筆者の想像でしかないが、先ほど博士論文末尾に書いてあった「クロス」すること、Crossing というのは保莉さんの仕事のなかで重要なキーワードの 1 つであった。こ

こではその淵源がどのあたりにあるのかを考えてみたい。

その手掛かりになりそうなのが、保莉さんが生前、次のような話をしていたことである。

「彼 [保莉実] が「生涯の師」と仰いでいたのは、フォーカシングの村里忠之さん、グリーンジの長老のジミー・マンガヤリさん、文化人類学のデボラ・ローズさん (デビー) の 3 人で、彼女の本は自著に先がけて翻訳出版したし [ローズ 2001]、筆者が知る限りでも彼は最後の調査の直前まで、デビーが気にしていたラパポートやエリアーデの日本における最新の研究動向を知ろうとしていた。また普段から『ジミーが魚が空を飛んだと言えば、本当に飛んだと信じられる』と家族にも話していたジミーじいさんが他界した時には、デビーにも泣いて連絡があったという。そしてフォーカシングは、彼自身がフォーカサーもできたことから、彼とキャンベラで歓談したときにも、バタイユ、橋本治、ドゥルーズやチャクラバルティらの話と共に出てきた話題で、彼は、アボリジニの歴史実践の際の身体経験に言及し、『アボリジニの身体経験はフォーカシングの際の身体経験に似ているんじゃないかと思う』と語っていた」 [飯嶋 2007]³。

保莉さんの仕事が主に文化人類学、社会学、歴史学、アート/ミュージアムで取り上げられてきたことは別紙で紹介したが [飯嶋 in press]、これまで注目されてこなかったのは、彼がアボリジニの歴史実践にフォーカシングと同様の身体感覚を読み取っており、そのフォーカシングの師が村里忠之さん (1945 年～) であるということである。

フォーカシングというのは心理療法の 1 つで、ユージン・ジェンドリン (1926～2017) が始めたものだが、村里忠之さんはこのフォーカシングを日本に紹介した村瀬孝雄 [村瀬ほか 1995] に師事し、渡米してジェンドリン本人から教えを受けた人物である [諸富ほか編 2009]。保莉さんは一橋大学の学部生の時に友人の紹介で村里さんの読書会に顔をだすようになり、晩年の病床でも村里さんと読書をし、またフォーカシングも行っていた⁴。その

² 筆者がこの原稿のもととなった日本オーストラリア学会例会での発表を決めたのち、『ラディカル・オーラル・ヒストリー』の岩波現代文庫版解説で本橋哲也さんがこの 2 人の著者の「花びら」に注目していたことを知った [本橋 2018]。これは当時の日本の人文学会で両者を知る者にと

ってある程度共有された思いだったのであろう。

³ 当時 [ローズ 2001] と書いていたのは 2003 の誤り。

⁴ 筆者は 2018 年 3 月 13 日村里忠之さんの仕事場宮カウニング・ルームを訪問し、4 時間ほどお話を伺った。不躰な訪問にもかかわらず厚遇していただいた村里氏に、

ため保莉さんの書棚には村瀬孝雄らが著した『フォーカシング事始め』[村瀬ほか 1995]もあったのである。

さて、保莉さんが歴史学で賛否両論をもって迎えられたその理由の1つには、ジミー長老をはじめとするアボリジニの語りを受け止めるその受け止め方にあったのは間違いなからう [保莉 2018 (2004): 24-36, 294-300]。そのことを気にしてであろう、歴史家のピーター・リードは保莉さんとの対話で以下のような質疑をしている。

—じゃあ、なんで君はカヤ [妖怪] を見たことがないの？

—だって、そういった怪物たちは、ピーター・リードが実在するように、客観的に実在するわけじゃないから。かといって僕の頭の中にだけ実在するわけでもない。そうじゃなくて、ある次元に実在しているんですよ、それはリアルなんです。 [保莉 2018 (2004): 219]

この次元を、「客観的に実在する」と受け取れば、そして実際そのように主張が受け止められたがゆえに、大きな拒否感も引き起こされるであろう。かといって、この次元を「頭の中にだけ実在する」と受け取れば、そして実際そのように主張が受け止められたがゆえに、「メタファー」とか「信仰」として囲い込むことで読者たちの拒否感を減免させてきたのである。だが、保莉さんはどちらも取らずに「ある次元に実在する」と言っていたのであるから、「ではどの次元に?!」と問わなくてはいけなかったはずなのだが、この問いはまだ誰からも問われていないようである。

この問いを解き明かすカギがフォーカシングの体験の次元にあるのではないかというのが私自身の判断である。というのもフォーカシングの創案者、ジェンドリン自身が1962年に以下のような言葉を述べているのである。

「私たちの哲学は(隠喩において、あるいはフェルトセンスからの語りにおいて) 経験的な意味感覚を形成することに優位を認めるのです。」「この逆転は、一つの新しい、より根本的

な経験主義(empiricism)を可能にします。」「本書の中で“隠喩”や“直感的把握”と呼ばれるものは、常に同じであり続ける言明を必要としない、ある種の真理(a kind of truth)に通じているのです。」「今日の見解とは反対に、自然は恣意的なものでもなければ、作り出されたものでもありません。それは認識システムよりもっと秩序的で、それは“応答する秩序(responsive order)”であり、多様な結果、しかし構成され演繹されるより以上に正確な結果を常にもたらすのです。それは素朴ではない経験主義(新しいより根本的な経験主義)に通じています。」 [Gendline 1962 in 村里 2009: 90-91]

ここにある「より根本的な経験主義」「ある種の真実」という言葉に、保莉さんの「ラディカル」「もうひとつの経験主義」「真摯さ」に響くものがあるのを読み取ることは深読みであろうか。

だがジェンドリンはその30年以上経ったあとにも「交差することと浸ること：自然的理解と論理構成との境界面に迫るための幾つかの用語」という論文を發表しており、その中には次のような言葉がある。

「交差においては、事実は何かの再現、正確な写しでは有り得ない。むしろ交差することが出来る一意味を成すことが出来るという事実が有るのである。我々は異なる経験と異なる文化を超えて互いを理解できる。それというのも、交差を通して、我々が互いの中に双方が以前それではなかったものを創り出すことが出来るからである。意志伝達と意味を成す事は予め存在していた共通性に依るのではない。それではまるで我々は既知の事しか理解できないことになってしまう。しかしそれは誤解でも歪みでもない。そうではなくて、我々が正確かつ厳密に理解されるとき、それが生じるのはそれが相手の中でどのように交差したかを我々が非常に熱心に聴こうとするときである。交差は相手の中に、彼らにとって、また我々にとって新しい何かを創造する。そのこ

とが我々が相手の反応に耳を傾けたがる理由であろう。」[ジェンドリン 2004 (1995)]

私はこの言葉が保莉さんが博士論文で書いた次のような言葉と響き合っているように思われる。既に引用した部分のやや前の部分からの原文なのだが、再度引用する価値があろう。

“I also wanted to share with you how apparently impossible but still passible it is to ‘communication over the gap’. Above all, I wanted to share with you the teachings from the Grindji country, Now I post it to you—the writer is vulnerable at this moment.

It is up to you whether you shift your being fully into the Gurindji historical reality (if you think you can), or firmly reject it. An alternative choice is, as I have been struggling through this thesis, trying to find a way of being ‘cross-cultural’. I believe cross-cultural practice, by definition, cannot avoid the risk of destabilizing one’s cultural framework. Otherwise, what is the point of calling it ‘cross-cultural’?” [Hokari 2003: 266]

ジェンドリンの 1995 年の論文主題は原文では“Crossing and Dipping”であり、この翻訳者が村里忠之さんなのである。実際この論文を前提としないと保莉さんのこの発言の意味が理解されがたいだろう。

「僕が訪問滞在したダグラグ村で行われていたことは、むしろ歴史をメンテナンスするっていう、これちょっと日本語にしづらいので困っているんですけども、歴史は常にそこにあって、それを一緒に大切にしている。みんな歴史をメンテナンスしていく。そういう歴史実践のあり方だったんですね。さらに別の言い方をすると、歴史にディップするでもいいかもしれません。ディッピング、つまり歴史に浸る生き方、歴史に取り囲まれて暮らす生き方、そういう生き方がある。」

[保莉 2018 (2004): 20-21]

このようなより根本的 (radical) な哲学で、浸り (dipping)、交差する (crossing) ことで「ある次元の実在」を受け止められるということがあったとして、ではいかにして開かれた和解は実現されるのであろうか。次にはその手掛かりを保莉さんの仕事の中から探ってみよう。

3. いかにつながるのか—開かれた和解とエスノグラフィ

「開かれた和解」という言葉で保莉さんが言おうとしていたのは、次のようなことであった。

「筆者が、オーストラリア先住民族との『開かれた和解』のために持ち込まれるべきだと考えているのは、こうした [テッサ・モーリス＝スズキの言う] 『連累の責任』を果たすための『歴史の主体』の分裂と政治化である。これは多重構造をもつはずだ。まず、『オーストラリア人』として和解に参加するためには、『オーストラリア人』という主体が分裂し政治化されなければならない。」「それぞれの主体位置においてこうした連累を引き受け、そこで生じる自己同一化の危機を主体の分裂と抗争として政治化していく作業こそが、国民統合の儀礼としての『閉じた和解』とは全く異なる、国境を越えた『開かれた和解』を可能にする。」

「オーストラリア先住民との『和解』をめぐる、多様な歴史主体が多様なポジションから関与している連累を導き出し、可視化することで、個々の主体のうちに分裂と抗争を生み出してゆく作業こそが、国境を越えてゆく『開かれた和解』を実現するため歴史家に課せられた課題ではなかろうか。」[保莉 2003: 75-76]

「連累」というのは、近代の法体系が責任を帰せられるところとして想定する行為をなした主体ではなく、むしろそうした主体がそのような主体となるために判断以前に環世界から受益してきた関係を指す [モーリス＝スズキ 2002: 56-58]。実際、そうした開かれた和解を必要とする歴史的環境を私たちは生きている。今日、サプライ・チェーン・スタディーズ [鶴見 1982; Appadurai ed. 1988 など] と呼ばれるもののほんのいくつかの事例だけでも

確認しておこう。

「話を森のことに絞るとして、ヨーロッパ人の侵略以来、原生林の面積として九〇%以上がすでに消滅してしまった。そして、残りの一割も無謀な皆伐計画に脅かされている。その森を食い尽くそうとしているのは、またもや浪費社会ニッポンなのであるから、いい加減いやになる。」[細川 1995: 47]

「ひとつはオーストラリア（再び北部準州）、もうひとつは米国西部（カリフォルニア州）の事件である。ともに核開発と先住民族の立場にかかわるものであるが、一方は核物質サイクルの始点であるウラン採掘の是非をめぐる紛争（ジャビルカ鉱山の開発阻止闘争）、他方はサイクルの終点である核廃棄物をめぐる紛争（ウォード溪谷の放射性廃棄物処分場立地反対闘争）である。」[細川 1999: 179]

「こうしてダイヤモンド生産は1981年から開始され、86年からは本格的な生産活動が続いている。年間、推定3億9400万カラットが産出され、オーストラリアは、主要なダイヤモンド生産国となった。特にピンク・ダイヤモンドは、この地域だけに産するもので世界的な評価を受けている。」[成田 2000: 104]

こうした木材、ウラニウム、ダイヤモンドのサプライ・チェーンの末端には日本の消費者がおり、こうした環世界において私たちは主体として作られてきている。だがそうであるとして、こうした連累への応答はいかにして果たされるのであろうか？

保刈さんが試みた開かれた和解は「歴史家に課せられた課題」として果たされようとしたのだが、私のように文化人類学を行うものの場合、歴史家の研究書の位置にあるのがエスノグラフィ（民族誌）であろう。しかしこのエスノグラフィそのものが、「ポスト・ファクト時代」の宣言を待つまでもなくすぐれてファクトをめぐる議論的になってきたのであった。

これまで自文化を批判し、自文化を内省させて

きたのは何も文化人類学を待つまでもなく、預言者のヴィジョンに淵源を持つであろうような『ユートピア』『1984』『高い城の男』などの数々のフィクションが先行していた。そこで「真実」が作品の中にこそあり、研究者の集めているものは「単なる事実」にすぎないと主張されることもあった。とはいえそれが作者と読者との間で「フィクション」であると共有される限りにおいてはなんら問題になり得なかった。

他方で、アカデミーにおいて、文化人類学は調査した資料を基にエスノグラフィを書き、『西太平洋の遠洋航海者』『ヌア一族』『ヌガラ』など数々のエスノグラフィを生み出してきた。そこでの「真実」はもちろん解釈の営みのなかにあるとはいえ、作者と読者の間に「ファクト」であることが前提とされていた。

問題はこの両者の間にある領域である。

それは具体的な作品名としては『パパラギ』『ルーツ』『呪術師と私』『苦海浄土』『リトル・トリー』『ミュータント・メッセージ』などの作品群であり、いわば「フィクション」と「ファクト」の間にある作品群である。

保刈さんの場合この両極の間で「開かれた和解」をおこなうのに「歴史経験への真摯さ (experiential historical truthfulness)」を指標に実現してゆこうというのが歴史家としての果たし方であった。こうした主張に共鳴する動きは国内外で既に出ている [飯嶋 in press]。だが他方で、歴史修正主義と歴史実証主義の闘争も依然として裁判で争われておりこれはこれで同じ史実性の土俵の上の闘いであるにしても別様の「歴史経験への真摯さ」であり「開かれた和解」へいたる道であるといえよう [歴史学研究会編 2017: 特に第1章]。

このことはエスノグラフィに置き換えても言えるであろう。そうであるとすれば、「開かれた和解」におけるエスノグラフィの実践も、多種多様でありこのポスト・ファクト時代における開かれた和解も複数の形であり得ることを意味していよう。

4. もうひとつの実践——ポスト・ファクト時代における Globalizing Reconciliations

ここで筆者自身が着目しているのは、歴史家の保刈さんとはことなり、エスノグラフィをある意

味で時間軸的に真逆に使うやり方で、開かれた和解に参加することである。エスノグラフィは上述したように、元来「ファクト」を描くことが期待されていたが、近年エスノグラフィの応用の仕方の一つに、デザインの分野への応答があり [Marcus 1998; Holotzblatt & Beyer 2017 (1998); Murphy 2016; Nolan 2017]、このデザインは現在既にある関係をより望ましい方向にデザインする目的で行われるため、常に未来に開かれているのである [Lindley & Sharma 2014; Lindley, Sharma, and Potts 2014; Kjaersgaard & Boer 2015]。

こうしたデザイン・エスノグラフィの領域は多岐にわたっているが、①デザイン・シンキング、②ビジネス・トランスフォーメーション、③ソーシャル・デザインに大別される。日本においては、商品開発や職場改善などにデザイン・シンキングを適用する①の流れであるが、それ以外にも企業の市場自体を変え、ついには企業自体の変化に適用する領域もあり②、社会関係そのものを変えてゆくという領域もある⁵。これまでは一企業が出資者となりやすいことから、企業内のプロジェクトに適用されることが多かったが、筆者自身が開かれた和解で行いたいと考えているのは③に近いものである [飯嶋 2017]。

具体例をあげよう。トヨタ自動車は、世界中に市場をもち、オセアニアの市場は相対的には小さいながらも、オーストラリアでは企業別生産台数がホールデンやフォードを抜いて首位に立っている。

このトヨタ自動車の先住民文化への影響力は大きい。北部オーストラリアの先住民の半族のなかにもしっかりとはいっている⁶し、中央オーストラリアにはトヨタが初めてやってきた場所が **Toyota Dreaming Place** という絵に描かれており⁷、南オーストラリアを舞台にした **Toyota Dreaming** という演劇もある [Savigne 2000]。トヨタは先住民の生活の一部になっているどころか、その根に入り込んでいると言えよう。

だがもちろん、トヨタが先住民文化に取り込ま

れるということは、トヨタに代表される自動車による文化変容の一因にもなることを意味している。中央オーストラリアでしばしば聞くのは、かつては親子で歩きながら道端の個々の植物を物語と共に学習する習慣がなくなり、行動域が拡大した分異民族間での紛争も生じ、何より交通事故死が増えたことなどが挙げられる。

これまで、一企業がデザイン・エスノグラフィを用いる際にはデザイン・シンキングが企業内のプロジェクトに適用されることが多かったと述べたが、こうしたトヨタのサプライ・チェーンは日本とオーストラリアの間のみならず世界各地のチェーンのなかで動いている。それゆえ、筆者が、もうひとつの「開かれた和解」ということを考えるとき、その **Reconciliations** の一部にエスノグラフィを用いて、生産・流通・消費、企業の内と外、人間と非人間の境界をギャップ越しにつなげないかと想うのである。そうしてエスノグラフィに携わった人びとが、オーストラリア先住民のカントリーに出遭えるようにと動けないであろうか。

これが保莉さんが歴史家として挑んだ「歴史経験への真摯さ」とはまた別様の、ポスト・ファクト時代におけるグローバル化する開かれた和解へのひとつの実践である。この実践は、上述したように、複数のいまここにいる私に連なる連累への応答を惹起するであろう。自動車だけでなく、ダイヤモンドだけでなく、ウラニウムだけでなく、パルプだけでもない。私を作った連累関係はグローバルに世界のローカルな実践に接続されている。その応答を具体的に、どこから始めるのか。

開かれゆく和解群に向けて応答しつつ、私たちも「ゆっくりと爆発を待とうではないですか」。

⁵ Re:public Inc.の田村大氏にご教示いただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

⁶ [ローズ 2003 (1996): 10] には「四輪駆動車」とあるが、原文では「Toyotas」である。トヨタが自動車の代名詞になっているからに他ならない。

⁷ 筆者がキャンベラの Australian Institute of Aboriginal and Torres Strait Islander Studies で見かけた写真では 1986 年にワルピリ民族が主に済むイェンドゥムの町で描かれたものの。

[参照文献]

- 飯嶋秀治 2007「保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房 http://www.hokariminoru.org/pdfs/reviews/ijima_200708.pdf (2018年12月14日最終確認)
- 飯嶋秀治 2017「コンタクト・ゾーンとしてのエデュケーション」、『コンタクト・ゾーン』9: 398-408
- 飯嶋秀治 in press 「『ラディカル』13年の軌跡」、保莉実とつながる会『一枚の花弁、爆発の行方』保莉実とつながる会
- 石牟礼道子 1990『花をたてまつる』葦書房
- ジェンドリン、ユージン T. 2004 (1995)「交差と浸ること：自然的理解と論理構成との境界面に迫るための幾つかの用語」村里忠之訳 http://www.focusing.org/jp/gendlin_crossing_jp.html (2018年4月27日最終確認)
- 鶴見良行 1982『バナナと日本人 フィリピン農園と食卓のあいだ』岩波新書
- 成田弘成 2000「開発の時代に生きるアボリジニ——西オーストラリア州東キンバリー地域のダイヤモンド鉱山開発の事例」、青柳まちこ編『開発の文化人類学』古今書院
- 保莉実 2003「オーストラリア先住民とジャパニーズ——開かれた『和解』に向けて」、『オーストラリア研究』第15号
- 保莉実 2018 (2004)『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』岩波現代文庫
- 保莉実とつながる会 2010『保莉実写真集 カントリーに呼ばれて ラディカル・オーラル・ヒストリーとオーストラリア・アボリジニ』保莉実とつながる会
- 細川弘明 1995「ゴンドワナ撲滅作戦の現在進行形」、『三省堂ぶっくれっと』113号
- 細川弘明 1997「『ミュタントメッセージ』の詐欺——アボリジニが来日して抗議キャンペーン」、『先住民族の10年NEWS』35号
- 細川弘明 1999「先住民運動と環境保護の切りむすぶところ——オーストラリアの事例を中心に」、『環境の豊かさをもとめて——理念と運動』講座人間と環境第12巻
- マーカス、ジョージ E. & マイケル M. J. フィッシャー 1989 (1986)『文化批判としての人類学——人間科学における実験的試み』永渕康之訳 紀伊国屋書店
- 村瀬孝雄ほか 1995『フォーカシング事始め——こころとからだにきく方法』日本・精神技術研究所
- 村里忠之 2009「『体験過程と意味の創造』について」、諸富祥彦ほか編『ジェンドリン哲学入門——フォーカシングの根底にあるもの』星雲社: 51-101
- 本橋哲也 2018「岩波現代文庫版解説 危険な花びら——保莉実と〈信頼の歴史学〉」、保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』岩波現代文庫: 363-382
- モリス＝スズキ、テッサ 2002『批判的想像力のために グローバル時代の日本』平凡社
- ローズ、デボラ B. 2003 (1996)『生命の大地 アボリジニ文化とエコロジー』保莉実訳 平凡社
- 歴史学研究会編 2017『現代歴史学の成果と課題 歴史実践の現在』積文堂出版
- Appadurai, Arjun ed. 1988 *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. Cambridge U.P.
- Denny, Rita & Patricia Sunderland eds. 2014 *Handbook of Anthropology in Business*. Routledge.
- Dusinberre, Martin 2017 “Japan, Global History, and the Great Silence”, *History Workshop Journal Issue 83*: 130-150
- Hokari, Minoru 2003 *Cross Culturalizing History: Journey to the Gurindji Way of Historical Practice*. ANU dissertation

- Hokari, Minoru 2011 *Gurindji Journey: A Japanese Historian in the Outback*. UNSW Press
- Holotzblatt, Karen & Hugh Beyer 2017 (1998) *Contextual Design: Design for Life Second Edition*. Morgan Kaufmann
- Kjaersgaard, Mette Gislev & Laurens Boer 2015 “The Speculative and the Mundane in Practices of Future-making: Exploring Relations Between Design Anthropology and Critical Design”
https://kadm.dk/sites/default/files/15_paper_mette_kjaersgaard_laurens_boer_0.pdf
- Lindley, Joseph & Dhruv Sharma 2014 “An Ethnography of the Future” <http://eprints.lanacs.ac.uk/74701/>
- Lindley, Joseph, Dhruv Sharma, and Robert Potts 2014 “Anticipatory Ethnography: Design as an Input to Design Ethnography” *EPIC2014* www.research.lanacs.ac.uk/portal/files/78440657/EPIC_PROCEEDINGS_VERSION.pdf
- Marcus, George E. 1998 *Ethnography Through Thick And Thin*. Princeton U.P.
- Murphy, Keith M. 2016 “Design and Anthropology”, *Annu. Rev. Anthropology* 2016. 45: 433-449
- Nolan, Riall W. 2017 *Using Anthropology in the World: A Guide to Becoming an Anthropologist Practitioner*. Routledge.
- Savigne, Faith de 2000 *Toyota Dreaming*. Australianplays.org

トヨタ自動車「海外販売の変遷」(2018年6月19日最終確認)

http://www.toyota.co.jp/jpn/company/history/75years/data/automotive_business/sales/sales_volume/overseas/region.html

Being Connected with HOKARI MINORU (2018年12月14日最終確認) <http://www.hokariminoru.org/>

Sydney Morning Herald“Holden: Numbers tell the story for the small fry of General Motors’ ecosystem” (2018年6月19日最終確認) <https://www.smh.com.au/business/holden-numbers-tell-the-story-for-the-small-fry-of-general-motors-ecosystem-20131213-2zcyb.html>